



# 派遣社員キャリアアップの 具体的な措置を徹底検証！ 派遣先がなすべきことは？

## 派遣社員のキャリア形成

平成27年に改正された労働者派遣法。その中のひとつに『均衡待遇の推進』があります。これは「派遣労働者」と「派遣先で同種の業務に従事する労働者」の待遇の均衡を図るため、派遣元事業主と派遣先にそれぞれ『新たな責務』が課されたというものです。

改正から1年経った今、改めてその責務について、人材プロオフィスキャラクターの「プロ子女史」を先生として、枚方つーしんキャラクター「ぼしひこくん」が質問をしていく会話形式で見ていくことにしましょう。

### 派遣キャリア形成

ぼしひこ(以下..ぼ)「来年春までにCD出すやろ？そのあとは深夜のテレビにまず出演して…」

プロ子(以下..プ)「何やってるの？」

ぼ「今後の俺のスター街道を設計してるねん。そろそろ芸能人としてのキャリアを考えたいかんと…」

プ「芸能人ね…(苦笑)それはそうと、派遣労働者のキャリア形成に関して去年改正された労働者派遣法で定められたのは知ってる？」

ぼ「知らんけど『キャリア形成』って自分でやっていかなアカンのやろ？」

プ「もちろん派遣社員さん自身が考えていく必要はあるわ。でも、派遣元会社も派遣先会社も『派遣社員さんのキャリアアップ』について手伝う義務があるのよ？」

ぼ「義務って？」

### 教育訓練の実施

プ「派遣労働者の基本的な教育は派遣元が行うんだけど、派遣先で業務と密接に関連した教育訓練を実施する場合があるの」

ぼ「派遣先『ならではのお仕事』を教えるってことね」

プ「その場合は派遣労働者に対して派遣先も教育訓練を実施する配慮義務があるというわけ」

働者に対して派遣先も教育訓練を実施する配慮義務があるというわけ」

ぼ「義務っていうと堅苦しいけど、業務をやってもらうために学んでもらわなアカンことを教えるってことやんな？」

プ「その通りよ。ただ、派遣先の労働者と必ず同様の教育訓練をしなければいけない訳では…」

ぼ「なるほど。派遣先でしか教育できない部分に関して、できる範囲で派遣先も協力してね！ってことやね」

## 派遣先が講ずべき措置

- 賃金水準の情報提供の配慮義務
- 教育訓練の実施に関する配慮義務
- 福利厚生施設の利用に関する配慮義務
- 派遣料金の額の決定に関する努力義務

### 派遣先管理台帳

プ「さらに派遣先には『派遣先管理台帳』に派遣労働者の労働内容などを記載する義務もあるの」

ぼ「なんか面倒くさそうやな…」

プ「会社によっては日報などをつけているところもあると思うけれど、それと同じようなものと考えればいいわ。重要なのは…」

- ・就業状況
- ・苦情処理状況
- ・教育訓練内容

などをしっかりと記載し、派遣元会社と情報を共有することよ」

ぼ「情報共有？」

プ「そう。派遣労働者のキャリアアップは派遣元会社だけでも不可能だし、派遣先会社だけでも不可能なことよ、双方が協力して情報を共有することで成り立つことなの」

## 派遣先管理台帳とは？

- 派遣労働者の「労働日」「労働時間」など就業実態を的確に把握するとともに、派遣元事業主の適正な雇用管理の実施の助けとなるもの

### 会社もキャリアアップ

プ「今回は派遣社員さんのキャリアアップについて見てきたけど、どうだった？」

ぼ「キャリアアップって個人的なことやと思ってたけど、『派遣先会社にとつてのキャリアアップ』の機会にもなるんやな」と思ったわ」

プ「…完璧な解答すぎて、逆に気持ち悪いわね」

ぼ「…てことは、今の俺の歌唱力がダメダメでも、レコード会社が俺を育てることでレコード会社にとつてのキャリアアップにもつながるってことやんな？じゃあ、今すぐどこでもスカウトしてくれていいんちゃうん？」



よっしゃです★

プ「どんな話でも自分のことにつなげられる才能は、きつとどの会社に行っても通用するわね…(苦笑)」



(おわり)

## プロ子の野望

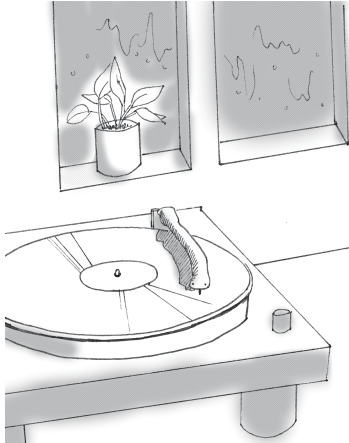
【前回のあらすじ】就職活動中のプロ子はある会社の説明会で疑問を感じ答えを探して人材プロオフィサーの大林と珈琲店で落ち合った。

「私は…大林はそう言っただけで黙ってしまった。プロ子は続きを早く聞きたい衝動を抑え、黙って次の言葉を待った」

「スミマセン…人の話を聞く方が多い仕事なので、自分の話になるとつい口下手になってしまいますね」

プロ子はどう答えていいかわからずに曖昧に笑みを作った。沈黙の後ろでうつつすると、レコード盤から流れるクラシック音楽が聞こえる。

「私は…人が嫌いです。できれば誰もいない場所で自給自足の生活をして…」



細々と生き、そして死んでいきたい」

そう言うとき大林は大きく息を吐き出した。

「でもねプロ子さん。その反面、人ともっと深く・密に関わることができればどんな気持ちになれるんだろう」といつも思っていました。完全に真逆の感情です。それが同居していたのが、ちょうどプロ子さんと同じくらいの年齢の私です」

プロ子は自分のことを言われているように思わず生唾を飲み込んだ。幸い強い雨の音で大林の耳にまでは届かなかったが、プロ子は自分を見透かされているようで怖さすら感じた。

プロ子にとつて他人と接することは面倒なことだった。けれど、これからの人生で他人と接することなく生きていくことは現実的に難しい。

ある意味「あきらめ」の感情から就職活動に取り組み始めたプロ子は、大林との出会いに偶然以上のめぐり合わせを感じずにはいられなかった。

(つづく)